

「コロナ時代の愛、あるいは 『いちばん大切な人と最も距離をとらなければ ならない時代の哲学』について」

大阪大学 CO デザインセンター センター長

池田 光穂

本日は、「コロナ時代の愛、あるいは『いちばん大切な人と最も距離を取らなければならない時代の哲学』について」という、少し大仰な講演タイトルをつけましたが、大阪大学での私の授業からのエピソードや CO デザインセンターの講義内容をいくつかお話させていただき、皆さま方がコロナ時代を生きていくうえでのヒント、気づきにいただければと思います。哲学用語で「撒種(さんしゅ)」といいますが、私の人生における経験をとおして学生たちに考えさせる教育スタイルを大学でとっておりますので、ここでもまず私の自己紹介から始めさせていただきます。

私は、大阪市北区で生まれ、子供の頃は母親から大変過保護に育てられました。ただ歳を重ねていくにつれてそれが窮屈に感じるようになり、大学は自宅から1mでも遠く離れた所へ行きたいという思いから大阪を離れて鹿児島大学へ入学しました。

大学ではとりわけ生態学(エコロジー)に非常に興味を持ち、当時新しくできた理学部の生物学研究室へ入りました。生態学という学問は、人間中心の考えではなく、あらゆる生物と自然の関係性を考えます。食物連鎖の頂点は人間ではなく肉食獣、肉食獣を支えるのは草食動物、草食動物を支えるのは植物、植物を支えるのは土壌や微生物、土壌・微生物を支えるのは空気や水などの無機物、無機物を支えるのは地球です。地球の外には既に生命体はいない。大気は、地球の重力によって引張られ拡散しません。重力の中心というものがあって、いろんなものが地球上に存在する。いろんなものが食うか食われるか、利用されるか利用されないか、あるいは共存する。それも相互に関係ない共存もあれば、非常に深い関係の場合もある。そのような勉強を学びました。卒論はニホンザルのフィードバックエコロジーということで、宮崎県にある幸島で研究をおこないました。ここは日本の霊長類学(サル学)の創始者である京都大学の今西錦司教授が砂にまみれた芋を塩水で洗い落とす若いサルを発見した島です。私が行った頃には、サル研

究はかなり詳しく進んでおりましたが、双眼鏡を用いてサルの食べ物をリストアップし、食べる時間を記録します。食べ物は主に植物ですが、それ以外に昆虫、小動物など、珍しいものではタコまで、海岸まで下りて食べるその奇妙な情景を今でも思い出します。200種類ぐらいの食物のダイバーシティと、時間を記録します。時間が分かれば消費エネルギーが分かります。食べ物の栄養分析をして、時間と消費する量(単位)を調べれば、どれぐらいのカロリー栄養をとっているかが分かります。それから生息地は温帯ですが極寒の下北半島がその北限であり、四季の変化や食べ物を提供する自然環境の変化などへも適応して生きているわけです。個を増やす生殖サイクルいわゆる繁殖期なども調べて、その進化的な適応プロセスを科学的に分析します。研究はフィールドワークですので、毎朝5時に弁当を作り、地下足袋を履いて山のなかを駆け巡り、秒単位でサルがどういったものを食べ、どのような体勢で暮らしているかの調査をおこなってきました。それは、自分自身が自然と一体となるというか、ほとんどサルと同じ生活をするわけです。百数十頭のサルがいましたが、個体識別と言いますが、1匹1匹のサルには名前があり、もの凄く時間がかかりましたが、人間の友達のように名前を覚えていきました。そうやって、個体、個猿がどういふふうに関係を消費していくのかということ学びました。

そのあと、大阪大学大学院医学研究科へ進み、蛋白質研究所というところでバイオリズムの研究をおこないました。サーカディアンリズムの研究をおこなうため、実験でネズミを殺して脳の中の補酵素の NAD-NADH の分析をするわけですが、そこで研究を続けることに私は挫折しました。それまでの生態学は、自然環境の中から得られるアバウトなデータを想像と類推で埋め合わせる研究でしたが、この実験室では、脳の生きた組織を蛍光カメラで写真を撮り、現像して、スキャナーにかけて、3Dの画像に示すことで、非常に正確なデータを測ることができます。研究者らしいとてもカッコいいものなのですが、最初

にフィールドワーク研究を擦り込まれた私にとってこの研究は向いていないと思い、その研究室を辞し社会学へ活動現場を移しました。

社会学という分野へ移り、医療人類学という勉強をしました。1983年から1987年まで、中央アメリカのホンジュラスの保健省へ配属され、マラリアや疫学調査の部署で研究活動を行いました。そこでフィールドの経験を取り戻すこととなります。ポリオワクチンや破傷風ワクチンを接種するために田舎へ看護師さんで行ったり、簡易水洗トイレを設置したり、野放し状態の犬へ首輪をつけ狂犬病の予防注射をするなどをしました。そこでは、文字も読めない住民の方々が大勢いましたので、衛生について教えるために紙芝居で伝え、住民の方々と一緒にお芝居などをします。皆さんにとって、日本でそのようなことは考えられないことなので、このような方々を可哀想だと思われるかもしれませんが、私もその当初はそう思っていました。しかしながら、そこでの体験を通じて、考え方が変わりました。

私が住んでいたホンジュラスの田舎は、ヘルスポストという小さな保健所に日本でいう准看護師さんのようなパートタイムの看護助手が詰めていて、2週間に4日ぐらいは自分の郷へ帰ってしまい閉まっています。基本的な医薬品だけ50~100円程度の自己負担で得ることが出来る、その程度しか医療資源がないところです。よって私は、ここには医療資源がないので、皆さん自身が、一人ひとり自分の健康を維持、獲得しないとダメだと、一所懸命吹聴して回りました。助手の人と共にそのことを伝えるために、一戸一戸回るわけですが、村人へ「一週間の間に、ご家族の人がどんな病気をされましたか」と尋ねてみると、具体的に答えてくれず、「私たちは、しょっちゅう病気です」というふうに戻ってくるのです。そして我々に、「どんな薬をくれるのですか?」と聞いてきます。「薬は持っていません」と言うと、けんもほろろに「帰れ、帰れ」と言われてしまいます。私や助手は、この村の人たちの健康を良くするために来ているのに、何故そのように言われるのか、非常にショックでした。あとでその理由を考えると、その村へは時々海外から援助団がやってきて、健康のデータをとるために採血や健康診断をしたあとに、薬を渡して帰ることが延々と続けられていたわけです。

他方で我々ボランティアは、子供が下痢になったときは脱水症が一番危険なので、塩と砂糖を混ぜてつくった湯冷ましを1リットルの空ペットボトルに入れて配りました。それは経口補水塩といって、殺菌作用があり脱水症状の予防になります。しかしながら、村人たちからは、「美味しくない」「下痢も止まらない」と文句を言われます。薬ではないと説明するのですが分かっただけで、私たちと村人たちとの間は、益々険悪な状況になっていきました。

そのような状況のなか、私と一緒に回ってくれた地元の方々は、私の考えをしっかりと理解してくれました。そして村人たちへ、

「人から物を強請ってはいけない」「自分たちの健康は自分たちで獲得しなければならない」と熱心に説明してくれました。そのおかげで、私はホンジュラスでの2年間なんとか無事に過ごすことが出来ました。ホンジュラスでの活動を通じて私自身が学んだことは、この経験を日本の同僚たちや、日本の多くの人たちに伝えることなのではないかということです。それについて皆さんは、日本では病気になれば医療者を訪ねればよく、国民皆保険制度のなか少ない負担で大部分は保険組合が払ってくれるので、薬もない途上国とは違うと思っておられるかもしれませんが、果たしてそれが幸せなことかという、私は疑問に思うのです。それは、途上国などの田舎に住む人たちは、自分たちの身の回りの資源をとことん使います。昔からの知恵で、身体の調子が悪くなれば薬草酒を作ってそれを飲み養生する、捻挫したら患部へ葉っぱを当てぼろ布で縛って対処する、もちろんその中には誤ったものがあるかもしれませんが、経験的に残っているものがある。それには、一生懸命に自分たちで生きていかなければならないマインドセットがあるわけです。しかしながら我々は、病気になれば軽度でもすぐに医者に見せないといけないと考えてしまいます。祖父母や父母のアドバイスよりも、医療者のアドバイスがより信頼性が高いと刷り込まれてしまっています。果たして、それで本当にいいのだろうかという感じがするのです。そう考えると、この豊かな保険や医療資源がある中でも、我々自身が健康になるために、自分たち、あるいは家族やコミュニティに何が出来るのか、どういふことが出来るのかを考えることが、非常に重要ではないかと考えるようになりました。

その後大阪大学に赴任して十数年になります。現在COデザインセンターで勤務し、今年4月からセンター長になりましたが、ここの教育の中にも、私自身の経験が活かされているのではないかと考えております。

Center for the Study of CO*Design Osaka University

- 大阪大学COデザインセンターは、学部高学年つまり3年生以上の学生、研究科の大学院生ならびに科目等履修生などの社会人むけに学内の共通教育である「高度教養教育」を行なう組織です。2016年7月に設立されましたので、今年で創設4年目になります。
- その設置の目的は、異なる領域の人と知識をつなぎ、社会課題の解決や新たな価値の創造に向けて専門的知識を役立てることのできる高度汎用力（課題発見力、課題解決力、社会実践力）を備えた人材を養成することです。
- COデザインセンター長が任期中（2020年4月~2022年3月）までに行う改革のポリシーは「新型コロナウイルスと私たちのキャンパス」をウェブで公開しています。

ここからは、現在勤めているCOデザインセンターについて紹介させていただきます。大阪大学の3~4年生、研究科の大学院生、科目等履修生、社会人を対象に、高度教養教育というものを教えています。皆さま方社会人の方へも授業を公開し

ていますので、是非積極的にご参加いただきたいと思います。私は臨床コミュニケーションという対人的なコミュニケーション教育をメインに行っており、大学院生向けには、インタビューや観察を通して実証的な方法を積み重ねていくエスノグラフィーを教えています。それ以外にも演劇の技法であるとか、人と人とのコミュニケーションをいろんな角度からアプローチすることを教えている所です。ふつう大学院はそれぞれの学問分野を深掘りするところですが、共通教育という部分を担っています。

その中で、高度汎用力の習得を目標に掲げております。高度汎用力とは、問題を見つける課題発見力、それを解決するための課題解決力、そして社会実践力の3つです。問題を発見し解決方法を見つけても、それを社会でやってみるためには、生身の人間を相手にしなければなりません。人と人との間には、社会経験の違い、考え方の違い、あるいは学歴、性別、年齢など様々な違いがあります。仮に同程度の課題解決力をもつ A さん B さんへ同じ内容の依頼をしてみると、A さんから「君の考えは間違っているね」、B さんから「それはいい考えですね。是非一緒にやりましょう」と正反対の回答がきたりするわけです。このようなケースでは、いずれの場合へも「依頼内容について、よく相手を観察しなさい」と指導します。頭ごなしに否定したり絶賛したりすることは、場合によっては中身を聞いていない可能性があります。人の話をよく聞く人であれば、「この部分は賛成ですが、この部分は少し承服しかねます」もしくは「少し考えさせていただけませんか」と答えるのがふつうです。日頃よりコミュニケーションに関する知識を備えておかなければ、ダメだということです。

コロナ時代の愛というタイトルなので、具体的な学生とのエピソードをひとつお話しします。ある恋愛の詩を朗読します。そして詩の作者はどうか、恋愛の相手はどんな人か、それぞれ性別を含めてみんなで議論してもらいます。そのあと種明かしとして、作者はニジンスキーというロシアバレエの男性ダンサーで、同性愛者なので恋愛の相手も男性であると伝えます。すると学生たちから、おうと歓声と驚きの声があがるわけです。そこで、私は、「何故驚くのでしょうか。その詩の中から、『恋愛は男性と女性の間だけのものではない』『恋愛は同じ世代間だけのものではない』とか『愛と憎しみは隣同士』ということが読み取れますが」というふうに学生たちへ話し、いかに我々は偏った見方で世界を見ているかということを理解してもらおうわけです。

このような我々の活動は、ただ単に教育、研究ということだけではなく、社会連携にも繋がると考えています。社会連携というのは、多くは大学が外に出てアウトリーチすること、あるいは企業さまから資金提供いただき、共同研究、寄附講座等をいただくことのように捉えられております。ただ私個人としては、社会人の方々が私どものような学生がいるところへきて共に学んでいただく、あるいは議論させていただくことが大事で

Center for the Study of CO*Design Osaka University

- 大学の機能は、教育、研究、社会連携の3つです。社会連携は、本学では「産学共創」という独自の言葉がありますが、本センターでの活動は、広く社会のさまざまなセクターとリンクするアウトリーチすなわち社会連携という名称のほうがよりふさわしいと私たちは思います。
- 教育については、3つのステップ、7つの術（アーツ）、3つのコースのキーワードで覚えていただければと思います。
- 研究では、学生・大学院生のイノベティブな能力を育てる高度汎用力、コミュニケーションデザイン、社会イノベーションの具体的な方策などの研究をおこなっています。
- 社会連携では、教員と教室が社会の外に出ていくアウトリーチ、社会のなかでさまざまな活動をしている団体＝アクター間の連携のための媒介活動、その中に産学共創というものを含めております。

あると思っています。私の授業へ社会人の方が来られたときには、研究している学生たちへ、社会人の方へも分かるように自己紹介をして下さいとアドバイスをします。COデザインセンターが実施する研究内容の詳細は、WEBでご確認下さい。私のところは裏のシラバスとオンデマンドにより、自分自身で勉強できる仕掛けも作っておりますので、是非おいください。

今回のテーマである、ポストコロナ社会へどう向き合うかですが、SDGsで掲げる17の目標へも繋がっていただければなりません。とりわけ私が強調したいのは、3番目の健康と福祉、5番目のジェンダー平等、これは日本ではダイバーシティ目標と言われており喫緊の課題です。そして10番目の不平等を無くす、世の中に不平等があると気がついたとき、リアルタイムに伝える必要があるということです。そしてそれらが16番目の平和と公正の実現へと、我々が全うに生きること、あるいは良いと思って生きることが正義に繋がっていくと思います。

コロナ禍では社会のさまざまな問題が浮き彫りになりました。健康や医療、ライフサイエンスに関わる知識の不均衡から、不安や不信、恐怖や混乱、噂やデマ、間違った予防や、ひどい時にはコロナウィルスは某国の陰謀だという風評を吹聴する自称専門家が跋扈することになりました。これは非常に困ったことです。高学歴の専門家の人たちが、時にはほとんどない意見を言っています。私たちは、相手の良心に訴えるしかありませんが、なかなか上手にコントロールできない。それに対して、どのように対処していけばいいのでしょうか。「もっと正確な知識を」といいますが、今日ポストコロナの時代は、クラウドナレッジの時代です。知識はインターネットなどで、いくらでも手に入ります。何がジレンマかというと、正確な知識のとなり不正確な扇動が併置されていることがより重要な問題です。

真の科学的判断力を育むためには、現在の学校教育における知識の詰め込みや教師の言うことを聞くことを良い児童・生徒・学生だと考える今までのやり方を根本的に改めるべきではないでしょうか。3つの未来教育の理念を提示して、私の話を終えたいと思います。それは、

- 1.自分自身で学ぶ豊かな教養力をつけること
- 2.対話コミュニケーション力をつけること
- 3.知識を現実化するための実践デザイン力をつけること

です。知識というものは、自分が汎用可能になるように身につけて、初めて知識となります。そのような知識を私たちは教養と呼んでいます。教養というのは、自ら心の中で、身体の中で、つくりあげていくもの、そのように定義しています。それから対話コミュニケーション力。我われは社会の中で生きています。人と人が繋がるのは、ただ単に言葉だけではなくて、ふれあい、コロナの中ではふれあいが制限されているわけですが、現在はインターネットなどを通じて違うタイプのふれあい、コミュニケーションというものがああります。それには、コロナがはやる前から、様々な利点と様々な弊害が指摘されていました。コロナの時代はそれが実際に日々試されている状況であると思います。

そして知識を現実化するための実践デザイン力。やはりこうなればいいなという理想を求めるのではなく、これよりもましというものを今すぐ始めればよいとよく言われます。自分自身の背中を押してくれる力、これが私はデザイン力だと考えます。デザイン力とは高度な難しい能力ではなく、皆さんひとり一人が既に持っているもので、それに対して言葉を与えていないだけだと思います。私は、皆さんひとり一人に、デザイン力というものを持っていらっしゃるということを、伝えたいと思います。

最後に、「いつまでコロナと戦うのでしょうか。そしてその答えは？」ということですが、「コロナ時代の愛」の洒落なのですが、ノーベル文学賞受賞者のガブリエル・ガルシアマルケスという人が、「コレラの時代の愛」という今から百数十年ぐらい前の時代設定にして、ちょうど私が生れた頃 1950 年代の中ごろ、その中の主人公であるフロレンティーノ・アリーサという人が最後に言う言葉です。

「いのちの続く限りだ!」

• Florentino Ariza tenía la respuesta preparada desde hacía cincuenta y tres años, siete meses y once días con sus noches.

• -Toda la vida --dijo

El amor en los tiempos del cólera por Gabriel García Márquez, en 1985.

日本語でも、木村栄一先生の翻訳になっていますので、非常に奇妙な小説なのですけれども、お読みください。ウィズコロナの時代も、ポストコロナの時代も、いのちの続く限りみなさんと頑張っていこうではありませんか。というのが、私の結論です。以上、ご清聴ありがとうございました。